



真一郎集

新潮日本文学

48



© Shinichiro Nakamura. Printed in Japan 1972

口絵写真撮影 小島啓祐

乱丁・落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替いたします。

定価 550円

中村真一郎集 新潮日本文学48

昭和四十七年六月三十日 印刷
昭和四十七年七月十二日 発行

著者 中村真一郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(〇三) (260) 一一一一

振替 東京八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿・加藤製本所

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株式会社

表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績株式会社

製函 文京紙器株式会社

目次

恋の泉

雲のゆき来

*

虚空の薔薇

空に消える雪

城への道

解説

年譜

丸谷才一

5

142

265

275

289

299

309

中村真一郎集

恋の泉

……街には金色の雨が降りそそいでいた。そのなかを昂然と歩いて行くのは、二十歳の私だった。青春の熱情にあって、雨に濡れることなど何物でもない。「四十歳の私ならば、神経痛を気にしなければならぬが」——そんな憂鬱な反省が一瞬の間、私の脳裏を横切った。が、すぐそれは忘れられ、私はそれからまた、明るく光っている舗道のうえに、足を運んだ。その足取りも夢のなかのように軽やかだった。私は自由だ。私の夢想は限りなく拡がることのできる。私にとって、世界はまだ生れたばかりなのだ、と私は（二十歳の私に返って）そう思った。街並の店の飾窓も、金の雨を受けて、金色に輝いていた。街路樹も金の葉を顫かせていた。微風が私の頬に快かった。私は自由だ。私にとって人生は、無限の可能性に充ち満ちている。私はまた、そう自分に云いさせた。私は二十歳だ。それは、輝かしい未来を意味している。私の人生は、もう一度、出発点から初まり直そうとしているのだ。まだ、あの忌わしい戦争も起っていなかった、純白の時代に……が、もし、

二十歳なら、私にとって、私自身ほども大事な友、魚崎礼吉が傍らに居るはずだ。私は次にそう思った。そうして実際に、既に私の腕は、魚崎の瘦せた腕と絡みあっていた。魚崎は詩人のように長く延ばした髪が額に垂れ下ってくるのを、癖の首の振り方で撥ねのけながら、私の顔を覗きこむようにして微笑した。魚崎の白い歯が純潔そのもののようになり美しかった。私には魚崎の云おうとしていることが判っていた。二十歳の私たちはお互いの眼を見合うだけで、お互いの心の中が見えたものだ、と私は思った。私は云った。「昨夜、とうとう、『恋の泉』を書きあげたよ。魚崎は私の腕を固く締めあげた。それは、戯曲、『恋の泉』は、作者である君だけのものではなく、ぼくたち皆のものなのだ、と私に告げようとしている合図なのだ。」ぼくたちは、とうとう、本当の日本の芝居を作りあげることに着手したのだ。明治以来、西洋の方に宛度もなく漂い出でしまっていた、日本の新劇というものが、ようやく本当の根を發見したのだ。その名譽がぼくたちの年代のものに帰せられることになったのだ。」魚崎は昂奮して語っていた。それは四十歳の魚崎の皮肉と反語と嘲笑とに満ちた話し方とは全く関係のない、純粹で夢見るような調子だった。私はその言葉の氣恥ずかしい内容に閉口するより前に、その調子に感傷的にされた。おれは長い歲月の後で、ようやくまた本当の魚崎を發見したのだ。魚崎の特徴のある大きな耳が、金色の露を宿しているのを眺めながら、私は大股に進んで

行つた。街の空は金色に煙っていた。……が、私は急に何か、不安な気分につえられた。私は立ち停り、魚崎の顔を見た。「あの女がいいじゃないか。君の女主人公のイメージそのものだ。」その魚崎の言葉が、私の中で時間を急に横すべりさせた。そうだ、その時——それは一瞬前に、金の雨のなかを魚崎と腕を組んで歩いてゐた時から、もう数年の年月が転回してゐた。——私はいつまでたつても上演する機会がなかった、私の『恋の泉』のために、主演女優を探してゐたのだ。そして、遂にその女性を発見したと信じた時、魚崎は私がついて、暗示めいたことをひと言も云わないうちに、もう気がついてそう私に告げたのだ。「主役はあの女だ」と。そうだ、魚崎は戦争中から戦後にかけての、長い療養生活のあとで、ようやく世の中へ戻つて、そうして、戦前の私たちの仲間の生き残りが作つた、小劇団に今、やつてきたのだ。当然、そこには彼の席は用意されてゐたから。そうして、彼はその最初の日に、あの女を稽古場の片隅に見出し、そうして、それを私に告げたのだ。だから私たちはもう三十歳になつており、そして、私も魚崎も二十歳の純粹な夢想家ではなくなつてゐる。——いや、これは現実ではなく、回想なのだ。と、私は自分^{自分}に云いきかせた。夢のなかで、過去の時間に迷ひ入つたのだ、と私は心の中でくりかえした。私はつい先ほど、二十歳だつたし、今はまた三十歳になつてゐる。だから、どうしてもこれは夢の中にちがいない。——それから、私は

急にまたより深い夢のなかへ陥ちこんで行き、あの女の姿をありありと見た。髪を金色に縁取らせながら、昔いつもそうであつたように、何か風に梢を揺られてゐる木のような感じの姿を。彼女の顔を正面から眺めたなら、その姿は消えてしまふだろう。私は惧れた。そうして、俱れながら、両腕を彼女の方に延ばした。彼女は明るく顔を輝かすと、くるりと向うへ向き返つた。「ぼくは随分、長く君を探してゐたんだよ。ヨーロッパの何処かへ消えてしまつた君を……」と、私は——そう、四十歳になつてゐる、夢の中の現在の私は——云つた。すると彼女は、もう一度、顔だけを向き直らせ、それから不意に消えてしまつた。後には金色の煙のようなものだけが残つた。私はその金色の煙に包まれながら、いつも彼女のことを想ひ出すたびに、胸が揺られることになる、あの音楽を聴いてゐる時のような気分につえられた。それは多分、セザール・フランクの『交響奏奏曲』だつた。その懐かしい主題が私の心の中で展開しはじめた。……が、その曲ははじまつたと思つと、忽ち、^慌しいウェスタンの曲に變つてしまつた。私はそんな筈はないと信じようとした。しかし、怒鳴りたてるような女の声は、執拗に私の耳を脅かす。私は夢のなかに立ち戻ろうとして、眼をきつく閉じようとして決心するが、そのやかましい曲は金色の雨となつて、私の臉のなかへまで降りこんでくるのだ。

私は遂に諦めて、眼を開いた。そして、まだ完全には現

実の世界に戻っていない私の意識は、部屋の中央に立って、金色に輝いている女の裸像を捉え、そして、それがあの女の裸の姿であると信じて、冒瀆を犯すことを恐れるあまり、もう一度、あわてて眼を閉じた。ここはどこだろう、と私は大急ぎで自分に云った。あの女、戦後の一時期の、あの私たちの演劇運動のなかへ、おぞおぞと入ってきて、それから魚崎の荒々しい手に、むずと掴まれたと思うと、とうとう私の『恋の泉』の上演も待たないで消えてしまった女。私が彼女について知っているのは、急に海外へ行ってしまったということだけである。その女が、夢のなかでなく、現実のなかで、私の前に裸で立っている。それはあり得ないことだ。そうして、現実の私の眼のまえに、その裸の肌をさらす女は、彼女ではない。それはまだようやく二十歳になったばかりのあの女、唐沢優里江の方なのだ。そうして、もし、優里江なら、ここは私の部屋なのだし、私は彼女を待ち疲れて、私のベッドの中で眠っていたのだ。

私は眼を開くのが惜しかった。十年振りでも夢のなかに現われて、そして消えて行ってしまったあの女、今、ようやくその名前を思い出した、萩寺聡子の残して行った、薔薇の花の匂いのような後味を、もう一瞬でも長く味わっていたかった。しかし、室内で鳴っているウェスタンの曲は、その聡子ではなく、唐沢優里江の存在を高らかに告げている。

私は諦めて眼を開いた。優里江は台所の方へ行っている

らしい。ソファの上には、彼女の脱ぎ散らした服が抛りだされている。ブラジャーが床の絨毯のうえに、奇妙な山形を作って落ちていた。私の眼は明るすぎ室内の光に、突き射されるような気がした。開け放たれた窓では、カーテンが風に吹かれて踊っていた。どうやら、雨が降っているらしかった。私は枕もとの時計を見た。五時。明方の五時だ。こんなに遅くまで、優里江はどこで遊んでいたのだ。誰と……

「今まで、何をしていたの？」

私は苛だつて叫ぶように云った。

台所と寝室との境の垂幕から首を出した優里江は、花の咲いたような明るい笑いを見せながら、叫び返した。

「何を云ってるのか聞えない。」

「聞えないさ。ラジオを停めなさい。夜中なのに、近所に迷惑だよ。」

私はラジオのスイッチを切る手付きをしてみせた。

優里江は相変らずの上機嫌で、垂幕の間から、生なましい裸体を滑りださせ、形のいい足を大腿に運んで、ラジオを消した。

「私、疲れたわ。仕事、今までかかってしまった。木戸さんみたいな凝り屋のディレクターないわ。」

彼女は私の方に向き直つて、両足を半開きにしたまま立っていた。明るい電光を浴びて、その姿は金色に輝いていた。下腹部の黒い茂みが、その金色の裸像に強いアクセシ

トをつけていた。

「ちっとも、疲れているようには見えない。いや、疲れるといふ言葉の本当の意味なんて、君はまだ知らないんだよ。」

私はその姿を眺めながら、讚嘆の気持ちに捉えられていた。眼りから覚めたばかりの私は、見慣れているはずのこの裸身を、今、この世に生れでて来たばかりの女神のように感じたのだ。

彼女は私に近寄ってきた。

「本当にお仕事だったのよ。私、少し遊んでから来るつもりだったのに、つまらなかつたわ。それにおなかも空いてしまったし。」

彼女はまだ枕に押しつけられたままの私の顔に、その顔を寄せてきた。

「眠そうねえ。今、コーヒーを作ってるの。」

それから彼女の唇は慌しく私の唇に触れた。私はその背に腕を廻した。

「先ず腹ごしらえよ。」

彼女は私の腕を押し戻すと、もう一度、私の唇に、その唇を押しつけた。今度は念入りに、しかし、殆ど何の感情も込めずに、運動でもするように。

「判ったでしょう？」

と、彼女は身を起すと云った。

「何が？」

「私の口、全然、お酒の匂いがしないでしょう？ スタジ

オから、すぐここへ来た証拠よ。」

私は彼女の肉体に対する嘆賞の気持ちで、一瞬間の疑いを忘れていた。

「何だ。そんなことどちらでもいいのに。でも、遊べなくて可哀想だったね。」

私は身を起そうとした。

「そのままでいらっしやい。今、サンドイッチ持ってきてあげる。このお部屋、煙草の煙で息も出来ないくらいだったわ。」

彼女は私に背を向けて、窓を閉めた。その背のうえに、編んだ二本の長い髪が、神話のなかの蛇のように踊った。臀の形の軽快さが私の胸に、明るい活力を喚び覚ましてくれた。

「雨が冷たいわ。」

彼女は私の方に向って、腕をこすって見せた。

それから優里江は相変らずの裸のまま、台所と寝室との間を行ったり来たりして、私の枕許の卓のうえに、飲物だの食物だのを並べた。

彼女は濃いコーヒーにブランドーを多めに注ぐと、カップを鼻先に持って行って、眼を細くして呟いた。

「いい匂い。……私、とつても落ちつくわ。こうやっていい気持ち。自分が時間の外へ出てしまつて、いつまでもこの瞬間が続くみたい。ねえ、静かじゃない？ 雨の音が聞えるわ。時間だけからじゃなしに、私、世の中の空間

の外へも出てしまっているみたい。」

「君は哲学者だね。裸の哲学者。」

「裸は人間の本性なのよ。私、着物を身体につけていると、落付けないの。」

それから、彼女の金色の瞳のなかを、悪戯っぽい光が走った。

「何を考えているんだい？」

「私、さっき、先生とのことどういふ具合になってるんだって訊かれたわ。私、ただのお友達よ、って云ったけど、でも、恋人でもないみたいね。こうやって、真夜中だか明方だかに、二人きりの部屋にいて、そうしてこんなに落付けるっていうの、恋人とだったらそうはいかないもの。先生って、私にとって本当は何なのかしら。」

彼女は小首を傾けて考えるふりをした。その小さな頭が、ギリシャの小彫刻の少女のように可憐だった。私の顔には思わず笑いが浮んだらしい。

「いや、笑っちゃ。私が何か真面目なことを云うと、直ぐ、皆、笑うから厭。私、そんなに滑稽なのかしら。」

彼女は上眼づかいになって、私の顔を覗きこみながら、コーヒーを啜った。

「先生には、濃すぎるわね。また、胃が痛くなるといけません。」

彼女は私の前のカップからコーヒーを半分ほど、自分の方に戻すと、残りの方を牛乳で薄めた。その動作の素早さ

と身振りの大きさとが、彼女の血の、他の日本の少女との相違を明らかに示していた。それが妙に悲しい感じを私に与えた。私の胸は暖かい湯か何かを流しこまれたような気持ちになった。

「何を考えているの？ 先生がそういう顔をする時、すごく深刻なことを冥想しているみたいに見える。優里江のことをお馬鹿さんだって考えているの？ それとも他の人のこと？」

「いや。」

私はゆっくりと首を横に振った。

「この生ぬるいコーヒーの味が、中学生の時、学校の前のミルク・ホールで飲んだ、コーヒー牛乳にそっくりだと思っていたのさ。」

それは半ばは出まかせだったが、半ばは実際、私の心はそうした過去の記憶の断片が、ふいと浮び出て来やすいように、いわば柔らかくなっていたのだ。彼女の身のこなしを眺めている間に私の胸を満たしてきた、よく理由の判らぬ感傷のために。だから、次の言葉は、自ずから湿った調子になった。

「でも、君はそんなミルク・ホールや、ミルク・コーヒーなんて知らないんだね。」

「私だって、戦後、すごく貧乏したのよ。」

私は笑いだした。

「いや、金の問題じゃない。年齢の問題だ。君はすごく若

「いんだよ。」

「でも、先生、私と恋愛してから、随分、若くなったわ。評判よ。」

「評判って？ 君とぼくとのこと？」

今度は優里江が笑いだした。

「先生と私とのことは絶対、秘密よ。評判なのは、先生が若くなったってこと。私に、先生と私とのことどうなんだって訊いた人ね。私に先生があんまり若くなくなったから怪しうって云ったわ。」

「誰だいな。その人って、木戸かい？」

「木戸さんだと思おうでしょう？ ところが違ふの。」

優里江は嬉しそうに水を飲んだ。

「木戸もテレビのディレクターとしては、才能はあると思うけど、あの才能は人間としての悪さと結びついたものでね。」

と、私は云った。彼女の否定の素早さが、かえって私に木戸についての疑念を増させたのかも知れない。

「あの人、すごい癡り屋ね。朝の五時まででもリハーサルをやらされたんじゃ、たまらない。でも、私がそのために遊んで歩けないから、先生は感謝すべきかも知れないわ。だから、悪人なんて云っちゃ悪いと思うな。……でも、先生と私とのこと訊いたの、本当に、木戸さんじゃない。あてて。」

「判らないよ。」

と私は云った。私は考える振りさえしなかった。優里江と話していると、話の内容などはどうでもよくなるのだった。その歌うような調子の言葉が、殆ど純粹に生理的な快感を与えてくれるのだったから。

「先生のお友達よ。お友達でさっきまで私と放送局にいた人。」

「ああ。」

と、私は口のなかで云った。この間、会った時の、髪を染めた魚崎の顔が眼のまえに浮んだ。笑う時に唇を曲げて、悪人らしくなる、あの癖はいつから彼のものになったのだろう。多分、若い優里江などは、はじめから魚崎を、そうした人の悪い皮肉屋だと思ひこんでいるのだろうが、私が知り合ったばかりの二十歳の彼は……私の脳裏を先程の夢の情景が走った。

「判ったでしょう？ 魚崎よ」

私は彼女が、私の昔の仲間で、そうして私と同年配である男を、呼び捨てにしたのに驚いた。

「魚崎って、悪い奴なんですってね。お友達のお友達を皆、取っつてしまふんですって？」

「馬鹿なこと云うもんじゃない。ただ彼は俳優なだけだ。俳優というものは、どうしても人生に対する態度が、普通の人間とは異つてしまふ。恋愛に対してだって、舞台の幻想を現実を持ちこんでしまふんだね。」

優里江は真面目な顔をして、私の口許を見つめていた。

「先生がお説教をするの素適だわ。私、お説教されるの大嫌いなんだけど、先生だけは特別。でも、裸にはお説教、似合わないかしら。」

「お説教じゃないよ。」

私はお説教という言葉によって、彼女と私との間を距てている年齢の深淵を指摘されたような気がして不愉快になった。私はその不愉快さをまぎらそうとして、彼女の肩に手を廻した。

彼女は笑いだした。

「くすぐりたい。もう少し待って。私、パンを食べなきゃ。」
彼女はパンの上に大きなチーズを載せて、それと、ジャムを塗った別のひときれのパンとを重ね合せた。それからそれを両手で持つと、子供のように精一杯の口をあけて、食いついた。

「先生、今の俳優の話。私もそうだったというの？ でも、私、本当に先生を好きなんだがなあ。女優としてじゃなしに、——笑ってちゃいや。私、まだ女優じゃない、女優の卵だつてこと、先生に云われなくても知ってる。——でも、私、女優としてじゃなく、女の子として、先生を好きなのよ。」

彼女は急がしく食べ、急がしく喋った。

「でも、君、ぼくを恋人とは思わないって云ったじゃないか。」

「だから、私、変なの。うまく云えないわ。恋人以上ね。」

恋人、父親、先生、そういうものを全部一緒にしたようなもの。私、とにかく先生と一緒にいると、安心なの。陽のいっぱい照った海のうえで、ポートのなかでうつらうつらしている時みたいに安心なの。」

「そんなことをしていて、沖へ流されてしまったら、どうするのさ。」

彼女は急に食べるのをやめると、口許にジャムをつけたままで、叫ぶように云った。

「判ったわ。魚崎の奴、私、先生を好きなのに気がついて、それで私に興味を持ちだしたのね。噂どおりの奴ね。」

「魚崎が何かしたのかい。」

と、私は云った。叫びながら、彼女がそり返ったために、形のいい乳房が空間に向って突き出されたのが、美しかった。

「さっき、エレベーターのなかで、先生と私とのことを訊いた時、私の肩をきつく抱いて、頬をすりつけたの。その前も、昨日だって、自分の車で私を送るって云って、無理に乗せて、車のなかで私の手を握って、おもちゃにしながら話してるのよ。うちの前まで来たら、これからどこかへ食事に行こうって、執こくすめるの。」

「君が、またなれなれしくしたんじゃないのかい。」

彼女は不意に立ちあがると、私を睨んだ。

「嫌い、先生。」

それから彼女の長い睫毛の先に、涙が溢れ出た。

「嫌い。」

彼女は窓のまえまで歩いて行くと、椅子を引きよせて、
私に背を向けたまま坐り、じっと雨を眺めだした。

「冗談じゃないか。」

私は静かに、なだめるように呼びかけた。

彼女の小さな頭が、いやいやをして、編んだ二本の髪が
肩に謎の字を書いた。

「もう寝なくちゃ、夜が明けてくるよ。」

それでも、強情に彼女は黙っていた。私は仕方なく、腹
這いになって、煙草に火をつけた。

「先生——」

と、彼女は向うを向いたまま、口をきいた。その声は、
いつもより低音で、そして大人っぽく湿っていた。

「先生、私、先生のこと、さっき父親みたいだつて云つた
けど、私、父のことは大嫌いなもの。あんな憎むべき、軽蔑
すべき男性はいないわ。卑怯よ。……だから、私、先生と
父とは全然、違う男性だと思つているのよ。だから、父親
みたいっていうのと、私の父とは別に考えて……」

「君のお父さん、よく在る日本人なんだよ。」

と、私は云つた。

「だから、私、日本人、嫌い。」

と、彼女は激しい口調で云い返した。

ああ、この娘は血液のうえて半分しか日本人ではないの
だ。と私は思つた。彼女の白人の血の半分が、日本人の方

の半分に向つて、反抗の声をあげたのだ。そこで私は不意
に、先程の夢のなかに現われた十年前の娘、萩寺聡子のこ
とを思いだした。彼女は黄色く透きとおつたような、木蓮
の花びらに似た肌を持つ、そうして彫刻家が途中で仕事を
止めたままのように、凹凸の不充分な顔の、いかにも日本
人らしい娘だった。しかし、その無邪気でおとなしそうな
少女の胸のなかにも、ヨーロッパに対する、明治時代以来
の多くの日本人の憧れの炎が燃えていた。それが彼女を戦
後の私たちの演劇運動——第二次の『仮面の会』へ入つて
こさせたのだらうし、また突然、私たちの眼のまえから消
えたあとで、パリの消印のある航空便を私のところまで送
りつけてくるようにさせたのだ。……彼女にとっては、そ
うしてまた、多くの日本の青年たちにとっては、西欧への
憧れと近代的な人間の自由への夢とはひとつのものなのだ。
そうして「新劇」という芸術も、洋画や洋楽と同じように、
そういう夢と憧れとを満たす、ひとつの形なのだ。多分、
奈良朝の人たちにとって、大陸の文明がそうであつたよう
に。また大陸風の演劇や音楽や服装や食事やがそうであつ
たように。そして、大陸との混血の娘が、そうした夢の具
体化として、王朝末期の物語には女主人公の役を担わされ
ている。……

私は初めて見るもののように、優里江の裸の背を凝視し
た。私にはそれが、『浜松中納言物語』かなにかの女主人
公と、私の心の中でひとつに溶け合うのを感じた。私は自

分が、十世紀も昔の私の祖先のひとりに、瞬間的に転生したように感じた。彼は、大唐帝国の文明の血が、半ばその血管のなかを流れている、そして、日本の言葉と長安や洛陽の市民たちの発音に幾分か似せて発音する少女を愛しながら、大陸の古典を読み、大陸の楽器を鳴らすことに日を暮らした。……そうして私は、私もまたこの、ヨーロッパと日本との間に肉体によって橋を架けている娘をいとしみながら、西洋の戯曲の翻訳などに熱中している。

「どうしたの？ 私が拗ねたので、つまらなくなつたの？」
優里江は、いつの間にかベッドのそばへ寄つて来て、私を覗きこむと、私の髪を撫んで顔を引きあげた。

「痛いよ。」

私はそういいながら、彼女の腋の下から漂いでた、異国風の匂いを嗅いだ。

「私が……って、もう一度、云つてごらん。」

「私が？……何よ。私が？」

私は、彼女が、「私が」と発音する時の、その「が」の音を愛していた。それは東京の人間独特の軽いグ音ではなく、西洋人のような重いグ音だった。それが私に、彼女のあの金色を含んだ瞳や、褐色を帯びて極度に細い頭髮やと同じように、西洋風の魅力を感じさせるのだった。

「私、先生みたいな風に、ガを発音できないの。でも、日本人はgって云わなきゃならない時でも、日本風のグになるわね。エレガントなんて。おかしいわ。」

彼女は私の枕許の文庫本を取りあげた。そして、また椅子に坐つて、裸の脚を組み合わすと、卓上のパンを左手で取りあげて、口にくわえながら、その小さな本を裸の膝のうでで開いた。それから彼女はそのパン片を左手にまた戻しながら、声に出して、その本、古い日本の歌の本のなかの一首を詠みあげた。

「忘れても人に語るな うたたねの

夢みてのちも長からじ世を……」

その声は美しく透明だった。深い紫の闇のなかに、小鳥が歌っているような、甘美な調子だった。私は彼女の小さな頭と、真面目な表情とを眺め、それから小声で云つた。

「もう一度。」

そして私は眼を閉じた。小鳥はふたたび闇のなかで歌いはじめた。そして、それは直ぐに闇のどこかに落ちて、沈黙に返つた。

「私たちの間のことは、誰にも知らせないで下さい、と昔の都の宮廷女性が、どこかの高貴な恋人に向つて頼んでいる歌だね。」

「この作者の名、何て読むのかしら、馬という字の名前の人。」

「ウマノナインシだ。あるいはメノナインシ。赤染衛門の妹らしい。一条帝の後宮ではじめは清少納言の同僚で、後では紫式部の同僚となった。梨壺の五歌仙のひとり……」

「こういう話をしている時の先生は、いちばん嬉しそう。」

私は多分、自分が夢見るような表情になっているのだらうと思った。『新古今集』は私の——あるいは私たちの戦前の『仮面の会』の仲間の、二十歳の夢に溶け合っている。私たちは冗談に、お互いを王朝風の渾名で呼び合ったことさえあった。私、民部兼広は、勿論、民部卿だった。そして、あの顔の長すぎる柏木嬢は、可哀そうに馬内侍だった。私たちの世代は恐らく明治以後はじめて、そうして、私たちの直前のマルキシズムの世代と鋭い対照をなして、日本の伝統的な文化の方に向き返ったのだ。はっきり現代とは断続したものであるとして、近代の西歐化のこちら岸からもう一度

「君はこういう古い歌に、詩を感じる事ができるかい？」と、私は訊いた。

「素晴らしいわ。この音のうねりはヴェルレーヌのフランス語のようだわ。私のなかの日本人とフランス人が、同時に感動するのね。」

彼女は両手を眼の高さにあげて、真直ぐに空間に差し延ばした。腕の生毛が金色に光った。それから眼を閉じ、口をかすかに開け、深く息を吸った。

「素晴らしいわ。」

と、彼女はまた呟いた。

「忘れても人に語るな……」

彼女は全身を、この短い歌の後味のなかに涵している。それは彼女の血のなかに生きている古い日本の感覚が受け入れているのだ。しかし、と私は同時に思った。今、その

感動を耐えられない想いで全身に表現しようとして、官能的な表情をとらせている、彼女の心の奥の衝動は、余りに西歐的なものだ。

彼女は腕を差し延ばしたままで立ち上った。それから私の横へ身体を滑りこませた。彼女は今度は両腕を脇腹につけて延ばし、そして、両脚を揃えたまま、天井に向けてゆっくりと上げて行った。両脚が垂直に立つと、一瞬、股が開かれ、それから音を立てて打ち合わされた。両脚がゆっくり降りてくる。それに伴って上半身が起き上る。両脚が床のうえに下りきった時、上半身が私の方へねじ向けられた。乳房の間が開いて、二つの乳首が別々の方向に仰向いた。それから上半身が私の胸のうえに倒れかかってきた。

「好きよ。……」

彼女の声は奇妙にかすれている。私はその声のなかに、昇まってきた官能への憧れを聞いた。彼女の片方の腕は私の頸のまわりに絡まりつき、もう片方の手は私の髪の毛のなかに入れられた。私の顔の真上に、長くてよく反った睫毛がある。そして、その睫毛を透して、真剣な怒りに似た表情をしている瞳が。私は腕を延ばして、枕許の壁にスイッチを倒した。室内は一瞬、闇に覆われた。しかし一瞬の後に窓の外は仄明りが、その闇のあいだに忍び込んできた。

「夜が明けてきたね。」

と、私は囁いた。

「いや、私たちの夜は、これからよ。眼を閉じて。……夜